

素心蠟梅 知らず素通りしてきた花であつた

蠟梅一枝甘くやさしく満たす 内科医院待合室

蠟梅仄かに匂う道 この冷え続くと予報言う

立ち止まる 雪受け儂げに咲くか蠟梅は

宰府の冷え 地底からしんしんと突きあがる

千三百年の古都 ひとり森閑と暮れゆく

都督府跡歩き戻れる 一面の雪踏み締めて

爆弾低気圧というらし 雷突如雲を砕く

雲まとい上りゆく 飛行機の音くぐもりて

流感に寝て 子の声蒼くくぐもりぬ

滋養剤を朝一便の速達で送る 子の母なり

神楽坂を歩く 古きも新しき店もみな晴れて

路地の神楽坂幾度巡り戻り また来たるか

雲間切れ博多湾見ゆる 泥の海かと思う

戻り来たれば 福岡空港の冷え極まりて

トンキンキンと 金槌の音に朝始まる

鍼師の指が叩けば 魔法のごとく凝り流る

雀とももの言う鍼師 一人分のしあわせ持つと

鍼終え背筋伸び 土産に大根いただき戻る

メジロきて遊べる 酷寒の朝の窓のそと

メジロ二羽零れ来て 侘助の枝撓み揺るる

黄昏れて冷え締めまりくる 川底に光るあり

鎮守の杜やしろにあがる 北風吹き上げくる板間

北風舞い来たり 杜やしろゴウと鳴り揺れ止まず

名前呼ばれ 廊下の隅の検査室に入りぬ

検査日近づけば 重病になりくる今年も

礎石広く余し 筑前国分寺用地の片隅に建つ

四王寺の稜線深々と蒼く 国分寺の甍を抱く

太宰府晴天 十一月の古道をゆるりと歩く

祖霊殿を訪ねる 天神の杜のの奥に建つ

無人の庭に はびこりし秋草を一人筆る

伸び放題の竹の葉を ざくざくと切る

ノーベル賞受賞者が 世界と競う意気語る

ナンバーワンを目指す 意気に首肯する

並み外れたる樂觀主義 よき指針なり